

# 第2回 「甦る末廣農場(1)」

～ 富里から世界を見た男 橋常喜 ～ 林田利之

## 1. 末廣農場の開場

末廣農場は現在の七栄地区に所在し、総面積 343 町歩 (340 h a、東京ドーム約 73 個分) (図 1) という広大なものでした。今、その範囲を地図上に示してみると、七栄地区の約 3 分の 1 を占めている状況がわかります。

明治維新後、徳川幕府の直轄放牧地であった富里の地は開拓地として利用されることとなります。これは、幕府の終焉により職を失った武士や商人などの窮民と呼ばれる人々を救済することを目的として明治政府によって勧められたものでした。政府は補助金を出して農民の移住を進めましたが、もともと農業をした事のない人が多かったことや、自然災害、火災などの人災が災いして計画は思うように進まず、やがて補助金制度も廃止されたことから開拓を諦めて富里の地を去る人々が増えました。

政府はやむなく大区域の土地の払い下げを計画し、この計画に応じた複数の事業者が土地を購入することになります。七栄の土地については河村信吾氏が購入しましたが、河村氏は代金の納入に苦しむことになり、明治 20 年 (1887) 岩崎彌之助に依頼してこれを買替えてもらうことになります。その後、彌之助は土地利用について久彌に依頼することになります。

岩崎家としては、当初の目的としてこの土地で農業と畜産を行う予定でした。しかし、土地が痩せて地力が弱く、すぐには事業が興せないとマツ、スギ、ヒノキ 111 万本の植林を行い、ここに三菱社の「下総植林事業所」を設けました。当初は、地名である「獅子穴牧場」と称していました。また、地元の人々は扇形に開く独特の地形にちなんで「末広の野原」(図 2) とも呼んでいたようです。



図 1 末広牧場の範囲・

図 2 地名由来の地形

こうして、20 年間は植林地として事業が継続されることとなりますが、明治 44 年に久彌の実弟である正彌がアメリカモルガン大学を卒業して帰国したのに際し、翌大正元年 11 月 1 日 (図 3)、正彌のために養鶏と養豚の事業を開始させました。この時、農場名に「末広の野原」の名前が採用され、ここに「末廣農場」が誕生しました。

叔父が興した小岩井農場では牛馬の飼育が主でしたが、末廣農場では養鶏、養豚の飼育が行われました。正彌が導入した洋式の養鶏法では、箸で千切れるくらいの柔らかな肉を生産することに成功します。

これらの肉は宮内省、大使館、帝国ホテル、料亭末広などに卸され一般市場に出回ることはありませんでしたが、唯一、料亭末広では鶏の刺身を作って出していたこともあり、食通の間では好評を博していたようです。しかし、生産コストの高い高級品であったため、生産すればするほど赤字となる商品で合ったことから、営利事業としては失敗に終わりました。

それ以外では農場事業は順調に進みましたが、大正 4 年、正彌が東京の工業会社に異動となったことを機に末廣農場の活動は休止状態となり、大正 8 年から久彌自らが経営に携わって行くこととなります。

久彌が経営に携わる以前から、末廣農場の誕生と終焉を見守った人物が、今回お話をさせて頂く橋常喜氏 (図 4) でした。常喜氏の生涯は、末廣農場と共にあったといっても過言ではなく、氏の残された写真や手紙類は、我々に末廣農場の姿を伝えてくれる貴重な資料と言えます。

図 4 42 歳頃の橋常喜氏



図 3 大正元年 11 月 1 日第一回記念祭